

「統一教会って何？－宗教学と聖書から考える－」

日本キリスト改革派教会 名古屋岩の上教会

2022年11月13日14時～（礼拝堂）

相馬伸郎

序

さる7月8日、安倍晋三元首相がひとりの青年によって銃撃され死亡するという衝撃的な事件が起きました。容疑者は、無抵抗で取り押さえられ逮捕されました。その日の内の報道で、犯行はどうやら「ある宗教団体」への恨みを晴らすためのものとだけ流されました。実はそのとき、私は、ただちに統一教会のことだと思いました。なぜなら、2021年9月12日、統一教会のフロント組織である「宇宙平和連合」の集会にビデオメッセージ送って参加しているそのビデオを観たことがあったからです。こうして大変異例なことでしたが、10日の日曜日の説教で、何故、マスメディアは旧統一教会と安倍元首相の問題を取り上げないのか、それが日本の政治状況に恐ろしい闇が秘められているのではないかと言及しました。そして、その週の水曜日あたりから「世界平和統一家庭連合」という聞きなれない宗教団体のことが取り上げられ始め、今日に及んでいます。

私なりに、世界平和統一家庭連合と安倍一族の関係、つまり祖父の岸信介氏による「勝共連合」の文鮮明との深い関係にあったことは把握していたつもりでした。つまり、統一教会の別動隊である勝共連合と自民党とが結託して、自民党は、日本における共産党批判の急先鋒としてこの団体を利用して、いわゆる左派、左翼的言論を封殺するいわば「鉄砲玉」のように利用してきたことを知っていました。そもそも、わたしは、自民党の地方組織や議員は、共産党やリベラル勢力を排除することを第一の目的にして政治活動をしているのではないかと考えています。その意味で正しく統一教会、勝共連合の目的と完全にダブりますから統一教会と自民党との癒着関係を苦々しく思っていました。

しかし、正直に申しますと、まさかここまで自分たちの団体の存続とその教えを擁護するために、国会議員、地方議員に食い込み、取り込んでいたのかについては気づきませんでした。私自身はむしろ、市民集会やデモなどのスピーチでは、「日本会議」や「神道政治連盟」という宗教的イデオロギーが自民党の国会議員、政府のほとんどのメンバーに影響力を及ぼしていることに繰り返し注意を喚起してまいりました。つまり、自民党は国家神道や神道的カルト団体に影響を受けているきわめて宗教的イデオロ

ギーに染まっている政治団体であると批判し、その危険性を訴えて参りました。しかし、正直に申しますと、これまで統一教会のことは一度も触れたことがなかったのであります。痛恨の極みです。今の私自身の関心は、もしかすると日本会議と統一教会とは深いかかわりがあるのではないか、そのような疑いを持っています。今後、調べてみたいと思っています。

I 宗教の定義

(1) キリスト教は宗教なのか

最初に宗教について考えてみたいと思います。私は今年で牧師になって35年になります。日曜日は必ず教会で、聖書に記されている神の言葉を説いています。説教と申します。しかし、その説教ではキリスト教という宗教について語ったことは、ほとんどないのです。なぜなら礼拝での説教とは、今ここに共に生きておられる真の神を礼拝するために、神の言葉を解き明かすこと、神の言葉を宣言することだからです。その意味では、生きておられる神ご自身を語り、それを信じる人間の営みであるキリスト教という歴史的存在、宗教現象を考察し、解説し語り、同じようでも全く違うわけです。

チラシの講師紹介にありましたが、確かに、何年か前まで大学では、キリスト教学や宗教学を講じていました。聖書やキリスト教を学ぶことは、およそ、人類の英知を凝縮したような古典中の古典、そこから生まれ出た人類の知的な営みの巨大な全体像、世界のありとあらゆる領域にかかわる事象をひもとくためには必須の知識、知恵を与えられると考えるからです。キリスト教主義であろうとなかろうと、若い時に聖書やキリスト教を知ることが、特に日本人の宿題、世界に生きる現代日本人に課された宿題のように思います。宿題のたとえば義務であり楽しいものではありませんが、聖書を学ぶことは最高に楽しい学びだと思います。

今回は言わば、これまで私どもの教会では扱わなかったような学びを提供したいと思います。これは、教会員のためであり、一般の方々のためでもあります。そして、この学びには一つの目的があります。それは、統一教会か同じようによるおかしい宗教に引っ張られる方が周囲にいらしゃれば、「ちょっと待って」と呼び止めてもらいたいからです。まさかと思われるかもしれませんが、皆さまの中ですら、統一教会のようなカルトに騙される可能性は決してゼロではないからです。統一教会の勧誘の武器は、ビデオを視聴させることです。ビデオセンターというところに誘われ

るのです。おもしろい統計がありますが、街頭アンケートから誘われてビデオセンターに誘われた 100 名の中からはなんと 5 名が入会者になると言われます。実に、2%が被害に遭ってしまうのです。彼らはその 2%を目指して活動しているわけです。(自立への苦闘 統一協会を脱会して 全国統一協会被害者家族の会 編 教文館 2005 年) 私自身、統一教会の教典である「原理講論」を読むのは、本当につらかったのです。しかし、誰かのために、本日、大切な知識を得て頂きたいと思います。

私自身のことで恐縮ですが、私は、自分が宗教者であるとか宗教をしているという自覚を持たないままに歩いて参りました。なぜなら、私自身は、いわゆるキリスト教を宗教とは考えていない立場に立っている者だからです。何故、宗教とは考えないのでしょうか。私の理解では、宗教とは人間が神に至ろうとする働きを指すものだからです。聖書によればそのような企ては、まったくのお門違いであり不可能な行為なのです。聖書が明らかにする真理は、神ご自身が人間のために、人間の救いに向かって働いておられるその御働きのことです。神ご自身が人間に関心を注いで下さり、つまり愛して救おうと働きかけ続けていて下さるのです。その意味で、人間のいわゆる宗教的営みこそ実は不信仰であり、偶像礼拝そのものだと私自身は一貫してこのような立場をもって生きて参りました。

ただし同時にこの立場は、まさにキリスト教を唯一絶対の救いとする立場に立つという事になります。そこにある種の危うさ、正しく宗教の持つ怖さがあることをもわきまえているつもりです。それは、キリスト教や教会もまた、自己絶対化の過ちに陥りやすいということです。放っておくと、他宗教から学んだり、他宗教の方を尊敬しなくなる危険性をはらんでいるのです。さらに放っておけば、他宗教の方や信じていない方々を気づかない内に迫害する、攻撃するということすら起こる場合があります。

確かに、主イエス・キリストは「わたしは道であり真理でありいのちである」と自己紹介されました。これは、まことに大変な言葉です。このように言える人は、言葉の正しい意味で、本当にその通りの人なのか、さもないければまさに人を騙す教祖、カルト的教祖か、二つに一つでしかないからです。統一教会の教祖は、まさに、自分を神、絶対者であると主張します。自分こそ、再臨のメシア、最後のキリストだと自己宣伝しています。

真理であり道であり命である主イエスは、驚くべきことにこの真理を決して、人々に押し付けませんでした。この真理を信じさせるため、納得させるために、真理以外の方法、愛以外の方法を用いませんでした。一方で、文鮮明は、自分を信じさせるための心理的テクニック、操作を駆使します。

それがビデオをみせて、徐々に感情に働きかけて、ついにこれまでのさまざまなことは、文鮮明が救い主だと信じさせるための方便、企てにするのです。誰が、最初から文鮮明を神だとか再臨の救い主だと伝えられていれば、おそらくは100人が100人、おかしい、近寄らないほうが良いと判断できるだろうと思います。本物と偽物を見分けるためのヒントがここにあるはずです。

(2) 宗教とは何か

そもそも日本において「宗教」と言う言葉はありませんでした。近いところでは仏教の「宗旨」があります。「宗」とは、真理、根本真理、仏教という「般若」のことです。「教」とは、人々を「宗」に入らせるための教説のことです。その意味では、仏教における宗旨とは、そもそも宗は一つであるものの、その教は人々の数だけ多くなるという理解を持っているわけです。(川田熊太郎 文化と宗教 1948年「宗旨」)

新政府は、日本には、欧米の「Religion」の訳語にあたる言葉がなかったので「宗教」をこれにあてました。ここで少し、宗教の語義、定義について学びましょう。英語の Religion は語源的に言えば、ラテン語の「religio」: レリジオから来ています。これは、re-legere リ-レグレという動詞の変化形です。また、哲学者キケロ (BC106-143) は、re-legere を再び-集める、読むという意味から、深く思考することと捉えました。宗教とは実に、深く、徹底的に思考する、熟慮するという知的な営みだということです。さらに、ラクタンティウス (Lactantius 250-325) は「re-ligare = リ-リガレ 再-縛る⇒再び結びつけること、つまり神と人とを結合させるものと捉えました。そして、この理解は、正に聖書の使信である「福音」に即していますから、キリスト教世界、欧米では Religion、宗教とは、人間と神を再びつなぐものという理解が一般的とされています。神学者アウグスティヌス (354~430年) のように、宗教が神と人とを再びつなぎ合わせることであれば、その再びつなぎ合わせる救い主イエス・キリストを証しする聖書のメッセージこそ、正しく宗教であるという理解、主張になるわけです。英語圏、あるいは世界的な一定の理解にもとづく宗教とは、聖書の使信、とりわけ新約聖書の使信に即していると言ってよいと思います。私自身も、この立場です。ただし、もし、宗教の定義をこのように限定すれば、おそらく聖書的宗教には当てはまりませんが、原始仏教、つまり釈尊が説いた仏教は、この宗教の概念に当てはま

らなくなるだろうと思われます。その意味では、原始仏教の側からの包括的な宗教の定義が求められているように、私自身は思います。

ちなみに、1961年に文部省調査局宗務課は、世界には104種以上の宗教の定義があると報告しました。主なものを紹介するだけでも大変です。もはや宗教学という学問に譲らなければなりません。宗教の定義としては、日本の宗教学の権威とされる岸本英夫氏のものが定説とされているのだらうと思います。私自身も最後になお暫定的なものでしかないと思いますが、ご紹介しておきます。「宗教とは、人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりを持つと、人々に信じられているいとなみを中心とした文化現象である。宗教には、その営みとの関連において、神観念や神聖性を伴う場合が多い。(岸本英夫 1903-1964)」

要するに、人生の意味を明らかにし、死に対する解決をもたらしてくれると信じられている文化現象です。そうであれば、仏教をはじめまじめな宗教であれば、ほとんどがこれに収まるだらうと思います。そして初めに紹介したキケロの re-legere の理解を大切にすることが、今日の世界においてどれほど重要であるかを思います。つまり、宗教とは「深く思考すること」と捉える理解です。聖書から生まれた宗教でも仏教でも、本来、宗教とは深く、徹底的に思考する、熟慮するという知的な営みだということ、私どもは今一度、省みたいと思う者です。逆に言えば、知的な営みを回避する宗教は、怪しいのです。危険な臭いがします。

「鯛の頭も信心から」ということわざがあります。「つまり宗教とは信じる心があれば鯛の頭も拝むことだという」消極的、批判的な意味で使われているだらうと思います。皆様の中には、特定の宗教の信者の方は少ないのではないかと拝察いたします。そこで、社会生活をしているとき、特定の宗教の信者と出会うとき、おそらくこのような言葉をお伝えするかもしれません。「ああ、〇〇教を やっている のですね。確かに信じる気持ちは大切ですよ。心が落ち着いて、心の拠り所になるわけですね。いいですね。」同時に心の中で、「ごめんなさい。私は別にそこまで精神的に弱くもないし、何よりちょっと考えればそんな愚かなことに私ははまりませんよ」と心の中で考えているのではないのでしょうか。要するに、日本人の多くは、「宗教とは、信じることで心が平安になって、悩みが解決されるものだから、その人の心の拠り所」と言う程度の理解だと思えます。同時に、宗教は、非理性的で非論理的なもの、まあ感情の問題なのでしょうと低く見るわけです。ところが、そのように仰る方が、案外、占いを気にしていたり、たたりを怖がってみたり、験を担いでみたりするのです。クリスマ

スになればそれを楽しみ、大晦日に除夜の鐘を鳴らし、元旦には初詣に参ることを矛盾なく成し遂げて見せるのです。このような日本人を、キリスト教的宗教観から見れば、申し訳ないのですが、でたらめ、ものを考えない人々と思われてしまいやすいだろうと思います。誠実さ、真実な生き方から程遠い、物事を真剣に考え抜くことを知らない、異様な人々と見られやすいのです。これは、日本の中では、通用しますが、もし、わたしは無宗教です。神も仏も信じていません」と自信満々で自己紹介すれば、逆に、「この人、やばい」という反応が、心の中でなされていることに気づくべきだと思います。人としてもし宗教が指し示す次元をまったく持っていない、持とうともしないのであればそれは、少し厳しい言い方になりますが、統一教会の反社会的団体、反社会性を帯びてしまうのだと思います。つまり、この世の中は今だけ、自分だけ楽しければそれでよいだとか、人生は結局お金と名誉と欲望だけだというような、いわゆる精神性、いわゆる社会を超越した次元を持っていないということになるからです。サンテグジュペリは、「本当に大切なものは見えない」と星の王子さまに言わせました。星の王子さまは、おかしな大人がたくさん登場します。ビジネスマンは毎日、星の数を数えているのです。星を見つめようとしなくて必死に計算しているのです。つまり、お金がすべてだというわけです。聖書は、「**私たちは見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづく**」コリントの信徒への手紙Ⅰ第4章12節があります。コヘレトの言葉第3章11節「**神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。**」ともあります。今だけ、自分だけしか考えられない人間はその人間性そのものが問われても、仕方がないように思うのですが、いかがでしょうか。反社会的宗教は断じて容認できません。しかし、超社会、脱社会の視点を一つも持てない人生は実に寂しく、貧しいものになるかを思う者であります。私自身は、我々日本人が、宗教にちゃんと向き合わないということにこそ、物事を中途半端にしか考えないあり方をよしとする特徴に繋がっているのではないかと、そのように考え、とても危惧しています。

さて、それならそのような特徴は、もともとの我々日本人の特徴なののでしょうか。これもわたしはそう思っていない。ここからはほんの少し、日本の宗教史を振り返ってみたいと思います。日本人はすでに江戸時代からまじめな宗教に出会ったとは言えません。それは幕府の宗教政策によるものでした。簡単に言えば、キリシタンを根絶するために仏教とその寺院

を政治利用したからです。1549年、ザビエルによってローマ・カトリックの教えが日本に伝えられます。1600年の推定人口は1940万人とされています。その内、キリシタンは75万人です。わずか50年でなんと4%近くがキリシタンになったわけです。江戸幕府は1612年にキリシタン禁教令を發布しました。踏絵を踏ませることや密告を奨励してキリシタンを徹底的に弾圧しました。自らキリシタンではないことを証明させるために、仏教寺院にこれを請け負わせる寺請制度を設けます。つまりすべての領民を「檀家」にしたのです。確かに、組織としての仏教寺院はこうして全国津々浦々に存在し、経済的な地盤を固め、幕藩体制の中で安泰な存在となり、権力を持ちました。同時に、正に葬式仏教と揶揄されるように、人々を慰め、励ます宗教としての本来の生命力を枯らして行ったのです。実は、この政策は仏教じしんのためにも悪しきものだったはずです。こうして1640年の「島原の乱」の後、キリシタンの抵抗のすさまじさに震えおのいた幕府は1664年に諸藩に「宗門改制度」と専任の役人「宗門改役」を設置するよう命じました。江戸時代の宗教社会とは、「わたしはキリシタンではありません」それだけが厳しく問われる世界、社会のように思えません。

日本人の宗教意識、宗教観を考察するとき、急所となるであろうことがこの時代のキリシタン迫害の徹底性です。これは正しく世界史上類例がない迫害であったと思います。その一つが「類族」の定めです。類族とは、強制的に改宗させられたキリシタンのことで、転びキリシタンと呼ばれた人々の「子孫」のことです。迫害され殺されたそこで終わるだけではなく、何と、類族は五代後まで幕府の監視下に置かれ、葬儀も自由に営むことが許されず、藩外に出ることさえできませんでした。五代の子孫にわたってまで類族に数えられて徹底的な差別にさらされたのです。このような幕府の宗教政策は、実に令和の今に至るまで日本人の心の底に宗教に深入りすること、キリスト教に深入りすることを恐れさせているのだと思っています。これを本当に克服することが、現代のキリスト者、教会の課題であるとわたしは考えています。

次に、明治政府の宗教政策を顧みてみたいと思います。日本を近代国家として構築するために大急ぎで欧米諸国の知識を吸収しました。そのために決定的な意味と意義を持ったのは1871年から73年夏までの、いわゆる「岩倉使節団」の派遣です。岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳（国際法学者）、田中不二麿（文部省）などおよそ50名の使

節団が、不平等条約の改正を目指して渡航しました。彼らはそこでキリスト教とそれが国家、市民にどのように影響を及ぼしているのかを肌で知ったのです。

ちなみに、あまり語られないことかもしれませんが、その前に、日本に改革派の信仰を伝えに来た宣教師たちの影響がありました。ヘボンの名はヘボン式ローマ字で有名かもしれませんが、そればかりではなくフルベッキなどは先ほど名前をあげた者の他に、青年武士たち高杉晋作、坂本龍馬、西郷隆盛、勝海舟、木戸、伊藤、井上薫などを集めて欧米の文化文明についての手ほどきを施していました。彼らは、国家にとって、宗教政策がどれほど重要な意味を持つのかを次第に悟って行ったのです。彼らは、仏教を国家の精神的基軸に据えるというプランはまったく出て来ませんでした。むしろ、これまで擁護されていた特権階級の仏教界にも刃を向けたのです。それは、国家神道を新しく構築するための障害となるだけだと判断したからです。類族、キリシタンを迫害していた寺院は、今度は迫害される側になってしまいます。

明治新政府は、キリスト教に対抗しうる宗教は日本にはないと判断します。そこで唯一、その可能性を秘めていたのが天皇の宗教利用です。これが明治政府によって創設された天皇の制度であり国家神道という国策宗教です。これは、言わば疑似キリスト教と言ってもよいかと思います。さらに言えば、カルトと言っても言い過ぎではないと思います。天皇をなんと「現人神」として、北海道から琉球、この国に生きるすべての人々を天皇の「赤子」つまり子どもとして、「臣民」つまり天皇の民とする自意識、信仰を植え付けていったのです。その帰結が、先の敗戦であります。

明治政府は、1868年、「神仏分離令」を発令します。宗教調査によれば、日本人の宗教人口は2億人以上になるのだそうです。つまり、一人が仏教と神道を掛け持ちしているからです。ある家には、仏壇もあり神棚もあるわけです。七五三は神社で、キリスト教式で結婚式を挙げ、葬式は仏式で営みます。キリスト教、仏教、神道を、単なる通過儀礼として言わば、消費するわけです。人生において通過儀礼は大切に、特に彩を与えても暮れるからだだと思います。同時に、自分の人生の中にまでは入らせない、拘束されたくはないというのが本音ではないかと思います。

とても厳しい言い方ですが、日本人の宗教観は、神も仏も併せて信じるという、いいかげんな宗教観だと思います。それは、繰り返しますが徹底的に思考しない。白黒をつけない。あいまいさを残したいのではないのでしょうか。聖徳太子の一七条の憲法ではありませんが、「和を以て貴しとな

す」です。個人としての自覚、一個の人格としての主張を持たないで皆に合わせて行くという、つまり多数派に合わせる、忖度する空気感です。「赤信号皆で渡ればこわくない」式の宗教理解は、権力者にとってはとても都合がよいのだと思います。真理のためなら一人でも立ち上がるというキリスト教的な人格理解とは真逆のあり方のように思います。

ところが明治政府は、このあいまいさ、神も仏もというあり方を強制的に分けさせたのです。日本人は、神道と仏教と言う異なる宗教思想、伝統を「**神仏習合**」という方法で、取り込みました。そもそも神道は、経典も教えという教えもない宗教学的に言えば**アニミズム**です。そのような言わば未開の宗教しか知らない日本人に、538年、外国の宗教である仏教、中国経由の「大乘仏教」が伝来します。正しく本格的な宗教、教えです。そればかりか世界観や国家統治のあり方などもそこに含まれるのです。言わば、明治新政府にとっての欧米のキリスト教との出会いに似たような衝撃が起こっただろうと思われれます。同時に、あまりにも深淵なその教えですから、一般大衆には届かなかったわけです。

もとに戻りますが、仏教を受入れるために三段階がありました。最初の段階は、「**神宮寺**」の建立です。神社の隣に寺院を建立しました。それは、なんと日本の愚かで弱いカミガミを仏が救ってあげようというものです。第二段階は、聖武天皇の時代のことです。そもそも仏教には「**天部**」という仏法の守護神がたくさんいました。そもそも仏教は、インドのヒンズー教をモチーフにしています。仏教は、日本の神々をも言わば仏教の「**守護神**」として取り込んで行きます。最後の段階が「**本地垂迹**」です。これは、日本のカミガミは、実は仏の化身であるという教えです。本地とは仏が本物で、垂迹とは「**仮の姿**」ということで、仏が仮の姿をとって現れたのが日本古来のカミガミであったということです。一方で、例えば鎌倉時代の蒙古襲来の脅威が、神風によって滅ぼされたということから、神道側から「**反本地垂迹説**」が言われました。

明治政府は、仏教側の本地垂迹説に立つ神仏習合からいきなり神仏分離へと180度転換します。先ほどの1868年の神仏分離令によって政府からだけではなく一般市民からも「**廃仏毀釈**」の嵐が吹き荒れます。廃仏毀釈とは、仏教寺院への破壊運動です。江戸時代には、「**一村一寺**」となり、村人は全員、「**寺請制度**」によって檀家にされたのです。江戸時代は完全な国教の地位を得たわけです。しかもそれは、教えや宗教教化の力が期待されたわけではありません。繰り返しますが、すべてはキリシタン迫害を徹底

するためでした。ちなみに天皇と天皇家もまた仏教徒であったと言う明らかな史実を、歴史から消してはならないと思います。

神道分離令は、土地改革の一端を担う政策としても考えられます。寺社領は「上知 あげち」つまり、土地が没収されてしまいました。そもそも幕府の天領は既に奉還されています。有力寺社は、幕府から与えられた「朱印地」と大名からの与えられた「黒印地」は租税が免除されていました。しかし、寺領の没収はそこに建てられていた寺院の破壊です。仏教各派は幕府によって庇護されてきた様々な特権、とりわけ経済的特権を奪われたのです。全国に**9万のお寺**があったものが廃仏毀釈によって**半減**してしまったと言われています。どれほど江戸市民に憎まれていたかが推し量られるだろうと思います。国家の弾圧だけではなく市民の破壊活動の力も強かったのです。

さて、神道に戻ります。神仏分離令を下支えにして、政府は欧米列強の国家的土台、精神的支柱とされていたキリスト教に対し、言わば「疑似キリスト教」としての国家神道を構築するのです。そのプランは既に、江戸後期の平田篤胤の「復古神道」の中にありました。そもそも神道は、経典も教えという教えもないアニミズム、宗教以前の存在です。しかし、仏教とのいわば対決のなかで「神道」という宗教へと発展して行きます。そのベースにキリスト教的概念、キリスト教神学の影響を認めることができるだろうと思います。こうして江戸時代後期、復古神道によって天皇教の土台は準備されていたのだと考えられます。神道が宗教になろうとすること、そもそも神道にはあり得ない一神教に近い強烈な教え、現人神としての天皇を立てた国家神道を新しく造り出したのです。政府は、神道をベースにしながら遂に国家神道、天皇教を超宗教と位置づけることによって、宗教政策を定めます。実に、新政府が造り出した人造宗教、新興宗教こそ国家神道に他なりません。

今日の日本人の宗教観にこびりつき、言わば根っこになってしまった部分は、実は、明治新政府によってつくられた**国策カルト宗教**、つまり**天皇教**に他なりません。万世一系の天皇という物語、つまり神話が、大日本帝国憲法の第一章天皇その第一條、つまり冒頭に掲げられているわけです。

「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」現人神の天皇教です。私に言わせれば、大日本帝国とはカルト宗教国家でした。その教義の中心が「国体」論です。すべては空想的神話をもとにしているものです。万世一系と言っても、古事記で言われるより、人類の歴史はさらに長いはずですし、

天皇も南北朝時代の歴史的事実を踏まえれば、つじつまが合わなくなるはずです。

日本を統治することとなったGHQは、敗戦の年の12月15日、「**神道指令**」を出します。「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」です。これによって宗教つまり国家神道と政治の分離、国家による神道への援助の廃止、教育からの神道の除去、神祇院が廃止されました。つまり、GHQは民主主義、法治主義、近代国家にとっての大前提、その土台が「信教の自由、思想・信条の自由」にあることを弁えていたのです。これがキリスト教伝統、とりわけ宗教改革のキリスト教である私ども改革派教会の言わば最大級の公共的貢献だと思います。迫害されてきた教会だからこそ、気づかされた基本権利だったと思います。この信教の自由という基本的人権を現実化する方法が「政教分離規定」です。

ここで一つのまとめをしてみたいと思います。廃仏毀釈の維新後の仏教界は、新政府にすり寄りその庇護を受けられるように従順な姿勢を強めて行きます。この結果何が起こったのでしょうか。結局、私どもキリスト教会と同じ運命をたどります。つまり、「**宗教報国**」です。戦争推進を宗教的に支えて行きました。国家の介入、国家による特別な庇護を受けた宗教団体がたどる道、それはあまりにも惨めなものとなるのではないのでしょうか。

一方で、今日、「**日本会議**」や「**神道政治連盟**」は、大日本帝国時代の日本への回帰を目指して、自民党に強烈な政治的工作をしかけています。しかしそのような政治運動とは結局、現在の神社神道そのものに深い意味で、正しい意味で益にはならない、そのように強く思うのです。本当に神社が日本人に安らぎのような空間をもたらすことを目指すのなら、江戸幕府が寺請け制度によって仏教を形骸化させ、その宗教的力をそいでしまったように、神社もまた、国家管理の神社に戻とうとするなら、同じ過ちを繰り返すことになると思います。だからこそ、むしろ古来の神道や神社を大切に思うなら、むしろ日本会議のような猛烈な政治運動、自民党への働きかけは道を誤っているとしか思えないのです。およそ、宗教団体が、国家の庇護を受けることによってその存在を神社神道をはじめ仏教でもキリスト教でもその経済的安泰、権力を持つとうと願うことは、宗教団体にとってはもとより人々にとっても、ただマイナスでしかない、そう考えます

私ども**日本キリスト改革派教会**は、敗戦後、まさに二度と戦争に協力する罪、神社参拝に敗北した偶像礼拝の罪を犯さないことを誓って、創立しました。名古屋岩の上教会もまた、まったく同じ罪の悔い改めをもって開

拓伝道を始めました。そして、二度と同じ過ちを犯さないために、日本の教会の戦争責任そして戦後責任を担うことのできる自律した聖書的教会であり続けることを、まさに教会形成の柱として四半世紀歩んで参りました。その一つの実りが、このサロンやこれまで積み重ねて来た憲法カフェを生み出した「政治的ディアコニア室」の働きに他なりません。

日本キリスト改革派教会創立70周年宣言にこのように告白されています。名古屋岩の上教会は、この告白を裏切らない教会たらんとしているのです。「平和の福音に生きる教会は、思想・信条・宗教の違いを超えてすべての人を尊び、この世における正義と平和の実現のために彼らと共に働き、自ら進んで良き隣人となって世に仕える。また、暴力的な支配や戦争、平和に生きる権利と良心の自由とを侵害する国家的干渉に対しては、主の御心を大胆に宣言して否と言う。」

II 聖書の宗教

世界三大宗教という言い方があります。仏教、キリスト教、イスラム教です。2020年の統計でいうと、人口、78億のなかで、キリスト教は、24.4億人(31.3%)。イスラム教は、19.5億(25.0%)のようです。ちなみに仏教が4.9億人です。程度がいわゆる信者を持つと言われていています。宗教人口では、11億人のヒンドゥー教があります。ただし、インドの民族宗教であることから世界的宗教とは呼ばれません。もとよりこの宗教人口も厳密なものではありません。むしろ、キリスト教で言えば基本的には不可能だと思います。キリスト教にカウントされた人々は、自覚的なキリスト者ではなく伝統や慣習として受け止めているという場合が多いからです。イスラームの場合もまた国民全員がイスラームとされますが、宗教と国家とが一体化されているので、キリスト教より実情に近いように思います。なお、ここでは仏教のことは、多くの方がそれなりにご存じと思いますので、触れません。

キリスト教とイスラームは聖書を經典にする「聖書の宗教」もしくは「アブラハムの宗教」と分類できます。いえその前に、人口はわずかながらも決定的に大切なのはユダヤ教です。ユダヤ教こそ聖書の宗教の母のような存在だからです。ユダヤ教つまり旧約なしに

以下、ごく簡単に説明したいと思います。

宗教・呼び名 人口 72 億	経典	成立年代	信仰対象
ユダヤ教 ユダヤ人	ヘブライ語聖書(タナク律法・預言書・諸書=旧約) +タルムード (口伝律法の集成)	BC6～5 世紀のバビロン捕囚期	唯一の主なる神 ヤーウェ
キリスト教 キリスト者・クリスチャン 23 億人	旧約聖書 +新約聖書 (キリストの弟子たち=使徒が記した 27 の文書群)	AD 1～2 世紀頃	三位一体(父と子と聖霊)の神。 真の神であり真の人であるイエス
イスラーム ムスリム 18 億	旧約聖書(と新約) +クルアーン(預言者モハメットが受けた啓示の書)	7 世紀頃	アッラー

・旧約聖書を土台にして、それを解釈あるいは展開する+アルファによって異なる。

・ユダヤ教にとって旧約のみが聖書であるので、旧約という言い方は拒否する。

・キリスト教世界では、基本的にイスラームは同じ聖書の神を信じる兄弟関係にあるとは考えていない。

・クルアーンの中では、イエスを預言者の一人として重んじている。

創世記に登場するアブラハムを共通の起源とする。キリスト者もムスリムも、アブラハムの子であるイシュマエル(エジプトの女奴隷ハガルとの間に生まれた最初の子)を「アラブ民族の父」、イサク(正妻であるサラから生まれた神の契約の子)を「ヘブライ民族の父」と見なしている。ムスリムはイシュマエルをアブラハムの長男として重視する。キリスト者は、イサクのみを神の契約の子でありその子孫を重んじる。この子孫からイエスさまが誕生し、旧約の約束が新約において成就するという対応関係を見る。救いの歴史が約束と成就の関係で理解される。新約なしには旧約は理解できず、旧約なしには新約は意味をなさない。

Ⅲ キリスト教について

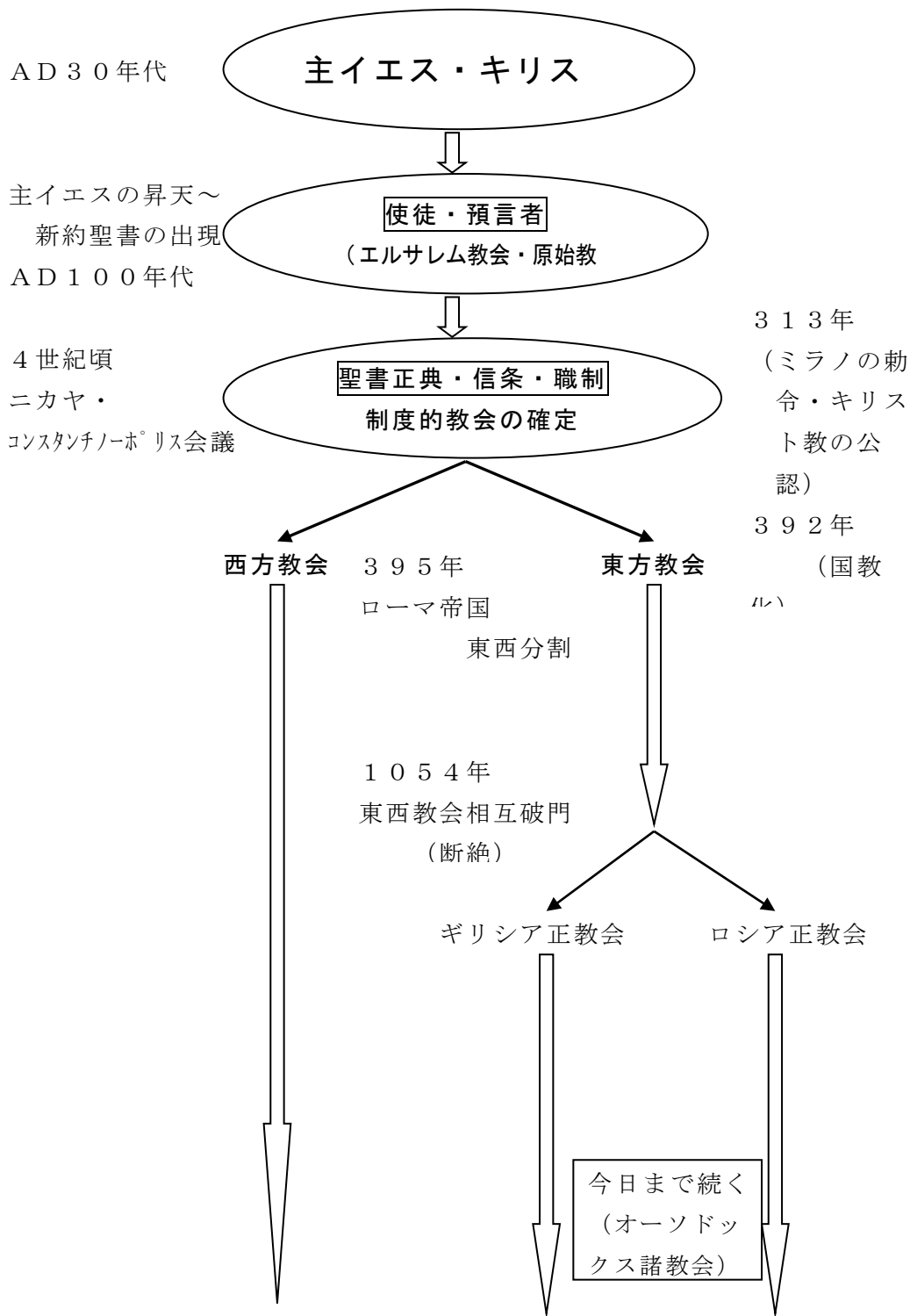
英語では Christianity です。日本語ではキリスト教と訳されましたが、クリスチャニティには「教え」の意味はありません。

英語で教会は Church です。日本語では教会と訳されましたが、チャーチには「教える集会」という意味はありません。いずれもギリシャ語の *Kýrios* (キュリオス・主 キュリアコス・主の) から派生した言葉です。主イエス・キリストという歴史的人格、存在が決定的な意味を持つものです。ある牧師は、「キリスト教とはキリストご自身のことです」と言いました。このイエス・キリストと結び合わされた者が Christian キリスト者、キリストの所有とされた者です。キリストは今、肉体においては天の父なる神の右にいらっしゃいます。しかし、地上においては聖霊によってキリストの教会とともに、教会において生きて働いておられます。ですから、わたしに言わせれば「キリスト教とはキリスト教会のこと」です。教会は聖書によればキリストの体と呼ばれ、キリストと結び合わされたキリスト者の共同体です。決して、この建物のこと意味しているわけではありません。

日本のプロテスタント・キリスト教は当初、佐幕武士を中心に受け入れられた経緯を持っています。その意味で、わずかなキリスト者でありながらその影響力は大きなものがありました。一方で、日本のキリスト教のある性格が庶民ではなくインテリのものでされた、伝道し受容された点に特徴があります。そこに日本の教会のアキレス腱もあるように思われます。

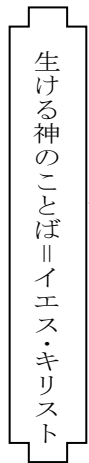
キリスト教とは、一つの宗教でも単なる「教え」ではありません。真理であると自己主張します。むしろ新約聖書、使徒言行録で繰り返された「この道」(使徒言行録 22:4) という自己理解こそ、キリスト教の本質があると思います。キリスト教とは「道」です。人間が生きる全領域にかかわる真理の全体像が示されています。その中心に魂の救い、福音としての罪の赦しがあります。しかし決して、キリスト教は心の中だけの問題なのではありません。救済的真理だけではなく人間の生活のありとあらゆる領域に関する真理であり生き方を求めるものなのです。しかも、そのようなまったく新しい生き方は、自分の力で成し遂げられるのではまったくありません。神の恵み、聖霊である神の力が働いてそれを成し遂げて下さるのです。

キリスト教会（教派）の歴史





- ・ 本質→神の言葉（40名余の著者が、それぞれの経験・性格をもって著述。しかし彼らに言葉を書かせたのは、神。）Ⅱペトロ 1:20-21 (p437)
- ・ 機能→キリスト証言（主イエス・キリストの教えより人格が大切。キリストとの出会いを体験しなければ、分からない。）ヨハネ福音書 5:39-40 (p173)
- ・ 権威→正典（信仰と生活の唯一絶対の規範・教会の書）
テモテの手紙Ⅱ 3:14-17 (p394)
- ・ 内容→救いの歴史（旧約＝イスラエル、新約＝教会を場とした神の選びと救いの物語。ご計画・御心の標本。
旧約聖書はキリストを待望し、新約聖書はその成就を示す。）



- ・ 聖書 = 記された 神の言葉（文書化・過去の確定）
 - ・ 聖餐（礼典） = 目に見える神の言葉（感覚でも捉えられる）
 - ・ 説教 = 語られる 神の言葉（今ここで語られる神）
- 聖書→イエス・キリストに出会わせ、礼拝させる書物。
 教会→礼拝する場所（キリストがおられる・キリストの体なる）＝教会。
 キリストがおられる教会が真の教会。キリストとの交わりが救い。
 「(Catholic) 教会の外に救いなし」（要丁寧な解説：非信者に対する宣言ではなく、聖書を知っているキリスト者の確信の表明）
 「教会なくしてキリスト教なし。」（教会的キリスト教）

「聖書だけ」しか持たない「教会」は、キリスト教とは呼べない。

改革派（プロテスタント）の聖書主義（聖書のみ）は聖書を信仰の唯一の規範＝規範する規範とするという意味であり、この規範が正しく機能させるために、「基本信条」が規範される規範としての位置を持たない限り、真理からの逸脱は自由自在となる。（上記イラスト参照 キヤノン・クレド・オルド）

	ローマ・カトリック教会	福音主義諸教会 (プロテスタント教会・教派)
歴史	使徒ペトロをローマ教会の最初の監督とする教会。主イエスはこのペトロに教会の土台を据えたと理解。よって、全教会の頂点にローマ教会がある(ローマの首位性)とする。 1054年に東と西に分裂。東の諸教会は、東方正教会、ギリシャ正教会。 1517年分裂→→	1517年のマルチン・ルターの教会改革運動によって出発。第二世代のジャン・カルバン(主著・キリスト教綱要)によって基礎構築。当時の教会(ローマ教会)を真のカトリック(公同性・使徒性)へと戻そう(リフォーム)とした。受け入れられず、新しい教会として出発した。
正典	旧約聖書及び第二正典としての七つの外典と新約聖書。	旧約聖書(39巻)と新約聖書(27巻)の66巻のみ。
教会の権威	聖書と教会の伝統(聖伝)。(つまり教会自身が聖書の上位に立つ)	聖書(正典)のみ。 (文書化された神の御言葉である聖書の下に教会は位置づけられ、御言葉によってのみ常に改革される。)
信条(聖書解釈・教えの規範)	使徒信条・ニカヤ信条・カルケドン信条(共有→) トリエント公会議諸文書他	使徒信条・ニカヤ信条・カルケドン信条 宗教改革以降の諸信仰告白
救済論	信仰と善き行いによって。洗礼を受けミサにあずかる。	信仰のみ=恵みのみ。
sacrament (聖礼典)	七つの秘蹟(洗礼、堅信、聖体拝領(ミサ)、悔悛、終油、叙階、結婚)	洗礼と聖餐。
教会組織	教皇を中心とした監督性、ヒエラルキー(上級者支配)。世界の統一組織。	すべての信徒が祭司の働き。職務としての教会役員(牧師・長老・執事)の三職。
その他	・教会の指導者は神父(男性・未婚者のみ)。ミサを執行する聖なる存在。 礼拝堂内は荘厳。十字架像・マリア像・マリアへの祈り。祭服。 第二バチカン公会議以降、劇的に刷新。福音主義教会への交流の促進。エキュメニカル運動(教会一致)の推進。地域の諸宗教を取り込む。	・牧師(教派によっては女性の牧師もいる。多くは家庭を持つ。牧師の職務の中心は教会で神の言葉の説教を担うこと。身分は信徒と同じ。務めは最重要礼拝堂内は簡素。十字架もない 様々な教派に分かれる。異端的教会の林立を許す。 徹底して神の主権に服し、異教的慣習に染まらないことを志す。先進諸国に多い。

統一教会とは

1 異端とは？

ユダの手紙 3 節 「愛する人たち、わたしたちが共にあずかる救いについて書き送りたいと、ひたすら願っておりました。あなたがたに手紙を書いて、聖なる者たちに一度伝えられた信仰のために戦うことを、勧めなければならないと思ったからです。」

今日、異端と正統を峻別し、異端を排斥する問題はとりわけ丁寧に扱う必要があります。国会を見ていると、ときどき「無意味な神学論争はやめましょう…」等という発言を聞くことがあります。政府、与党の「反知性主義」の流れで加速しているように思われます。実は教会自身も世間の批判をおそれて神学論争の熱心が冷めているかもしれません。由々しい事だと思えます。(宗教的) 真理は、命以上に大切だからです。

先程もあげました「いわしの頭も信心から」という宗教観を持つ人々もいらっしゃいます。その方々の視点から見れば、そもそも宗教には、正統だとか異端だとか、厳しい線引きなど必要ないではないかと言われるはずですが。実は、現代のキリスト教界の中からも、キリスト教のいわゆる絶対性の主張に対する厳しい自己批判が強く出ています。確かに、キリスト教の自己批判としては耳を傾けるべき主張だと思えます。しかし聖書じしんは、絶対的真理であると主張しているはずですが。使徒言行録第 4 章 12 節において使徒たちはこのように説教したのです。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」つまり、天下にイエス・キリストの御名以外に救いはないということです。したがって、聖書の宗教であるキリスト教はその真理性、正統性を徹底的に大切にしていまいりました。

教会は、真理を巡る誠実さの中で教会が教会とは何かを歴史的に会議を重ね議論を積み上げて一致した教えがあります。これが「教義」です。この教義を簡略にまとめたのが世界共通の信条、基本信条と呼ばれるニカイア・コンスタンティノープリス信条(381年 通称ニカヤ信条、その他、カルケドン信条と使徒信条を合わせて基本信条とも呼ばれる)です。そこで三位一体論(神は父なる神と子なる神と聖霊なる神の相互の交わりの内に存在する)と二性一人格論(イエスは真の神であり真の人、真の人となられた御子なる神)が確立しました。ごく簡単に言えば、まっとうなキリスト教会であるかどうかは、このニカヤ信条をちゃんと告白し、その告白通りに生きているかどうかにかかっているのです。

それならなぜ、それほどまで口うるさく教義だとか真理にこだわるのでしょうか。それは、私たち人類の救いが掛かっているからです。私たちの永遠、永遠のいのちがそこにかかっているからです。正しさの問題は実に命の問題、地上だけではなく天の命にもかかわっているからです。その意味では、他宗教には寛容ではあるものの異端には、とても厳しくなるという傾向性があるかもしれません。まったく違う相手、宗教であればみわけが付きまします。しかし、聖書を利用されるなら、これはそもそも教会が少なくとも 400 年余りかけて今日のように、旧約、新約 66 巻を正典として来た歴史、つまり、教会の信仰告白そのものである聖書を利用して、教会の教えを覆すことには、全力で阻止しなければならないのです。

ちなみに、主イエスはおっしゃいました。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」(マタイ 16:26) 聖書は、いのちに関する書物です。聖書は人のいのちを三つの側面から考察します。第一には、誰もが認める「生命」です。ビオス (βίος) というギリシャ語です。第二は、「魂」あるいは「霊」と呼ばれる命です。これは、神の形に似せて創造された人間だけに与えられた人間を人間たらしめている「いのち」です。プシュケー (ψυχή) と言います。最後に「永遠の命」ゾーエー (ζωή) です。主イエスは単なる生命のことを言ったのではありません。神を信じ、神を理解し、神と交わる場所としての「いのち」を失うことは、同時に神のいのちそのものである「永遠の命」を失うことです。ですから、あのクリスチャンたちが日本人としてはじめて生命より大切なもの、真理を知ったので、殉教を選んだのです。これは日本の精神史のなかで画期的な事件です。

元に戻りましょう。異端は、聖書を利用して「救いのようなもの」まがい物を提供します。しかし、まがい物では救われません。しかも、神ご自身の教えと願いを破壊するものです。ですから、決して容認できないのです。

一方で、歴上の異端論争の中に、どれほど政治的・人間的利害、主導権争いが入り込んで来たのかについての認識と自己批判の視座が厳しく求められます。言うまでもありませんが今日、いかなる意味でも異端の教えを語る団体や個人に暴力的刑罰を処してはなりません。徹底的に言論で真偽を明瞭にすべきです。一方で、牧師として異端の教説の流布に対して、ニカヤ信条の立役者アタナシウスや教会の改革者ルターやとりわけ私ども改革派教会の祖であるカルヴァンたちがどれほど異端との闘い、当時はローマ・カトリック教会と再洗礼派(アナバプテスト)たちとの闘いの姿勢をきちんと保持する必要があると考えます。今回の統一教会問題は、まさにキリスト教会の社

会的責任が問われる面があることを、教会じしんが強く認識しなければならないと考えています。

ここでごく簡単に、現代の日本にあるいわゆる三大異端について確認しましょう。統一教会を便宜上、また通念上あげています。しかし、少しその教えを覗いてみるなら、もはや、異端の枠外であることをご理解いただけるかと思えます。宗教でももとよりキリスト教の一派でもありません。教祖の欲望を最大化した宗教ビジネス、これがわたしの現時点での判定です。

1, エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）

1881年創立 アメリカ 創立者 チャールズ・T・ラッセル

1926年 日本支部設立（灯台社 明石順三） 22万人

聖書＋統治体（ブルックリンにあるものみの塔の決定機関・会長と12人？）による解釈（「聖書研究」「ものみの塔」誌）

世界の中で1, 2位の信者増。キリスト教系の宗教団体ではカトリックの次に多い。全戸訪問による伝道＝聖書の伝道方法とされている。言って彼らの聖書的（？）伝道方法で日本中くまなく複数回、個別訪問「聖書に興味がありませんか。あなたは戦争についてどう思いますか。キリスト教の国どうしが戦争していますが～」等がなされ有名。（迷惑がられている？）現在は路傍でパンフ配布が主流？ 伝道ノルマ 自分の救いに関する確信が得られない教義。伝道奉仕によって、終末の救済の保証を積む。

政治参加の禁止（投票禁止、公職に就かない⇒超政治的組織となる。組織が唯一絶対の真理と認識）輸血禁止、子どもたちへの信仰強制（体育・柔道剣道等禁止）、伝統的キリスト教会への激しい憎悪、攻撃（滅ぶべきバビロン・サタン＝十字架をかかげる教会と宣伝する）等など。

統一教会と正反対？ 政治権力への志向なし。統治体以外はほとんど無給の信者。正しく「宗教的」カルトと言えるのではないか。

終末預言の強調。創始者のラッセル氏はそもそもキリスト教のディスペンセーション主義教会の出身。

神の名は「エホバ」と主張。確かにかつてキリスト教界では、ヤーウェ（יהוה）という神の名の発音が特定できなかった時代に「エホバ」という言わば便宜的な名を用いた時代があった。《アドナイ（わたしの主）の母音を当てはめた》明治時代の元訳聖書もエホバを採用。ただし、現代聖書学者の常識（通説）であるこの一点で、その全教義は崩れてしまわざるを得ない。したがって彼らの独自の翻訳「新世界訳」以外に使用しない（できない）。

彼らの聖書預言（キリストの再臨の年月日を何度も特定した）が外れるたびに教義を無断修正。その都度、統治体に新しい啓示が与えられる？

2、モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）

1830年 アメリカ創立者ジョセフ・スミス 13万人

1823年9月21日、ジョセフ・スミスに天使が「完全な永遠の福音」が刻んである金板がニューヨーク・マンチェスターの丘の地面に埋めてあるとのお告げ。

一夫多妻制・同性婚等反対・避妊否定・本部ユタ州（人口の7割が信者）

3、世界基督教統一神霊協会（Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity） （1954年）

教祖文鮮明（ムン・ソンミョン・本名文龍明 次男 1920年～2012年）
1954年5月1日設立。1958年に日本に布教、1959年10月2日団体設立、1964年7月15日、宗教法人の認証を受けた。1982年の合同結婚式。

1960年3月16日、当時17歳の韓鶴子（ハン・ハクジャ）と結婚。この時期以降「合同結婚式」を開始。

1994年、教祖が統一教会の時代は終わったと宣言し教団名変更

➡世界平和統一家庭連合（Family Federation for World Peace and Unification; **FFWPU**）

なお、日本法人は、2015年教団名称変更認可（下村博文文科大臣の関与）。
2012年教祖死去に伴い妻（三番目）、韓鶴子（ハン・ハクチャ）氏が総裁就任。（世界平和女性連合、宇宙平和連合総裁）。17歳のとき40歳であった文鮮明の伴侶として選ばれる。母親は統一教会の信者。文鮮明は当初、母親と懇意であったと言われている。

なお、現在、12人いると言われる子供たちは、骨肉の戦いを展開している。文鮮明と韓鶴子の7男文亨進は、韓鶴子が父親の上位を主張したとして対立。2013年、韓鶴子により解任、世界平和統一聖殿（通称・サンクチュアリ教会）をアメリカ国内にて立ち上げた。

2020年5月8日、新しく「天の父母様聖会」を名乗る。統一教会の会館玄関に掲げられている写真を見ると「世界平和統一家庭連合」の上に、この文字が載せられています。今や、夫亡き後、韓鶴子が地上における神としての実権、主権を宣言したということであろう。現在の統一教会のベースは当然、文鮮明にあるものの、死去に伴う教団の危機回避によって韓鶴子の教え「みことば」が現在と将来の統一教会を決定することとなると思われます。すべての異端、カルト宗教は教祖によって教えが更新（改ざん）されて行きます。

新しい解釈や啓示なるものが登場して、自分たちの都合に合わせて行くからです。

さて、本日のお話のメインテーマによろやくたどり着きました。今回の集いの企画が決まって、私はただちに統一教会の教義の根底となる「原理講論」を購入して読み進めました。実は、実際に読むのは初めてのことでした。これは本当につらい読書体験でした。正直に申します。実は、読破できませんでした。後半からは斜め読みしただけです。特に、牧師だからなのかもしれませんが少し読み進めるだけで、本当に気持ちが悪くなりました。先週、長く統一教会の信者の救出に取り組んでいらっしゃる金沢教会の漆崎牧師にそのような印象についてメールしたら、こう返して下さいました。「吐き気が起こるのは健全な反応です」聖書を知っている人なら、正しく読むに堪えない「しろもの」なのです。

『原理講論』は文鮮明が受けたという啓示を根拠にしていると主張します。しかし啓示の客観的根拠は記されていません。そもそも、その教説には科学的な誤り、曲解の類があまりにも多いのです。もし高校生レベルの自然科学の知識をもった人であれば、初歩的な間違い、強引な解釈を指摘すべき箇所がたくさんあるはずです。私は、聖書の言わば専門家ですから、その立場から原理がその前提として悪用する聖書の解釈の一つひとつその誤りを指摘しようとしていました。しかし、断念しました。モルモンやエホバならまだ聖書を用いて批判することは有効だろうと、また大切だろうと思います。しかし原理講論の場合は、無駄のような気がいたしました。もとより、マインドコントロールを解くためには、ここは欠かすことができないはずですが、残念ながら、そこまでの段階に来ていただくためには、どれほど高いハードルを乗り越えなければならないのか、正しく脱会させる方、その親や家族の底知れぬ愛と忍耐が不可欠だろうと、脱会者の証言を伺うと分かります。

さて、そもそも原理の著者は、聖書の神、つまり聖書の宗教の共通の大前提である創造者なる神をまったく知らないとしか言いようがありません。確かにユダヤ教のヤーウェの神、イスラムのアッラーの神、キリスト教の三位一体の神、それぞれに異なります。しかし、少なくとも共通理解があります。天地万物を創造された絶対者であり超越者である全能の主権者でいらっしゃる神を信じることです。ところが統一原理が考えたカミなるものは、聖書の神に言わば「かすりもしない」のです。

そもそも、教祖は、聖書を利用しながら、聖書を不完全な書として批判し

ます。旧約そして新約を越えるのは「成約」としての原理だと言うわけです。この原理こそ真理であると主張する論法です。実に、聖書の神と、イエス・キリストの働きは失敗であった。だからこそ、最後のメシアである教祖が神であり、救世主であるという論法です。自分を神と宣言することがどれほど聖書の宗教からの逸脱か、これは基本のきのことなのです。

原理とは、古代の中国で生まれた自然哲学思想である「陰陽道」をベースにしています。これが原理に宗教の装いをもたらします。さらに世界人口の6割が経典とする聖書を利用し、古典の中の古典、聖書の衣装を隠れ蓑にしたものです。その本質は「淫教」です。言わばセックス教としか言いようのないものです。これは、単なる主観的評価ではありません。アメリカの下院外交委員会全国国際機構小委員会、いわゆるフレーザー委員会が統一教会の議会への不正工作を調査して、このように言いました。「聖書のセックス風解釈」です。なぜなら、この教義のベースは性交にあるからです。神に創造されたアダムとエバはエデンの園にいました。エバはそこでサタン、悪魔と性交をしたというのです。もとより聖書、創世記にそのようなことが記されているわけでは全くありません。この悪魔と性的関係をもったこと、原理はそれを罪と呼びます。これもキリスト教の原罪の教理とは無関係です。教祖は、全人類が性的墮落の罪を犯して、罪人、神の刑罰を受ける者になったが、メシアである自分の清い血と人類が統一すること、つまり、性的関係に入ることで救済されるというものです。そこに有名な合同結婚式が編み出されるわけです。

そして、招待を隠して勧誘した人に13巻のビデオを受講させます。その後、ツーデイズという泊りがけの修練会に誘います。その後、ライフトレーニングと言う2週間ほどの集中して、勧誘した人とされた人々の集団的生活を経て、フォーデイズという徹底的な修練会で、感情に働きかけていわゆる献身者にするのです。もはや心が教えに傾いている頃、このように言われます。「あなたにはこの墮落した血が流れている。先祖にも流れている。文鮮明先生が人類の最後のメシアです。このメシアが活着しているときに信じられるチャンスはあなただけです。あなたが信じればご先祖様はみんな地獄の苦しみから救い出されます。逆に信じて、メシアに従わないなら先祖もあなたの子孫も地獄の苦しみに落ちます。あなたに責任があります。信じるのはいつですか、今、でしょう。」先祖とあなたを地獄の苦しみから救うためには、統一教会の教え通りに行動しなさい、さもなくば永遠の地獄で苦しみ続けることになる脅迫されるのです。どこかビジネスの手法にも似た雰囲気

があります。最後の一品、しかもあなたしか買えないチャンス。何より、あくどいのは脅しです。解怨と言って、自分だけならいざ知らず先祖の地獄の苦しみを解くためには自分の全財産、全所有を神に返す、そうしなければ先祖のすべてを殺すことになる」と説教で脅すのです。(ビデオあり) 信じることでそしてお金を身ぐるみはがすかのように要求します。自己破産やサラ金で借金させてまでお金を求める、篡奪するのです。しかもそれを、宗教用語でカモフラージュして、献金だとか献身だとか神の悲しみをいやすのだとか、でたらめなことを言って、結局、ただ一つの目的、教祖の野望を実現するために信者を獲得し、彼らの人生のすべてを利用するのです。

さて、確かに恐ろしい団体ですが、しかし社会的にこれほど多大な影響を及ぼした原理なる教義を発明した人は、やはりどこかすぐれた宗教的、哲学的思考を持っているのではないか、もしかするとそのように評価する方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、実はこの教えには、言わば「種本」があるのです。文鮮明が十代の頃、心酔した異端の盗作、剽窃なのです。

それは、金聖道(キム・ソンド 女性 1884-1944)の教えです。彼女の主張はこのようなものです。いわく「・原罪の根は、善悪の知識の木から取って食べたことにあるのではなく、淫行関係による堕落にある。

・イエスの使命は十字架にかかることではなく、死なずに志を果たすことであった。

・再臨主は雲に乗ってくるのではなく、女性の体を通じて来られる。

・再臨主が韓国に来れば、万人が韓国を信仰の宗主国として訪ねてくるようになる。

・神には二つの悲しみがある。一つ目は、アダムが堕落する瞬間を知らず、これを止めることができなかつた悲しみ。二つ目は、イエスが使命を成し遂げられず十字架にかかったイエスを見たときの悲しみである。」完全に原理に引き継がれています。正に剽窃、パクリであることは明らかです。

文鮮明は、この異端の影響を受けた金百文の「イスラエル修道院」に入りました。彼はそこで学んだことを基に『原理原本』(1952年発行)を執筆しました。ただしこれは、金の著作『基督教根本原理』(1946年3月2日起草、1958年3月2日発行)の執筆中に文鮮明が盗作したという証言があります。この原理原本をもとに『原理解説』『原理講論』へと体系化したのは劉孝元という弟子です。

※「統一教会の本質にあるもの」(宣教と社会ニュース22年11月) 漆崎英之牧師(日本キリスト改革派教会宣教と社会問題に関する委員会委員)

2.統一教会の教え

α 「はじめての統一原理（文鮮明先生が解明した真理）」2014年光言社から引用します。

タイトルに【新しい真理—「統一原理」—】とあります。統一原理とは真理だということです。その真理の内容を六つ掲げてこのように記します。

① 「内外両面の無知を克服し、内外両面の知へと導く。」

内外両面の無知とは宗教という内的真理と科学という外的真理の二つは、これまで対立してきたが、この内外を統一し解決するのが新しい真理である統一原理と言います。

② 「神の存在とその心情を解明する。神が存在することだけでなく、神が人類に対してどのような心情を持っておられるかを解き明かす」

神の存在は、これまでの宗教が解明したが、教祖が神の心を解明すると言います。ここに決定的に、自分が神であるという宣言の根拠です。天地創造の冠である人間の創造を失敗した神の悲しみ、イエスが十字架で救済を成し遂げられなかった悲しみを強調し、憐れな力のない神を、教祖が救うという教えです。

③ 「唯心論と唯物論を統一する。民主主義と共産主義の対立を解決する。」

勝共連合をフロント組織にした教団は、反共ではなく共産主義に勝利する「勝共」という造語を造ったほど、自分を逮捕した共産党に対する憎悪が強い。しかし、それは自分の利益（感情）を根拠にしているに過ぎない。北朝鮮でビジネスチャンスを得られれば金王朝とのかかわりを大切にしている。逆に、そのルートに価値があることを悟り、これを自分たちの政治権力の拡大に利用する。彼らは決して民主主義を推進するのではなく、統一するので。つまり、教団そのものが地上天国を構築するという教えです。

④ 「キリスト教をはじめとする宗教のさまざまな課題を解決する。」

世界最大のメジャー宗教であるキリスト教を隠れ蓑にして、さらには宗教そのものを隠れ蓑にして教祖と統一教会をして全宗教を統一して、超宗教とするというとてつもない主張です。

⑤ 「すべての主義、思想、宗教を統一する。宗教、民族、思想、主義などの対立を解決する」

4とかぶっていますが、教祖は正しく、究極の壮大なビジョンを描いて見せます。およそ普通の人間の精神であれば、おそらくこのようなことは言い出せないはずです。自分を見つめ、自分を知る哲学的内省を知る人は、謙虚

にならざるを得ないはずだからです。自分の限界を弁えること、聖書で言えば「主なる神を畏れ敬うことは知恵初め、基本です。命の源」（詩編111：10、箴言14・27）聖書から言えば、まさに知恵や知識からはみ出た愚かな人間の典型と言わざるを得ません。ただし、人を騙すことを目的としているならこのような壮大さこそ、とりわけ大学生や若い世代にはアピールしやすいのかもしれませんが。アニメ漫画の世界のように世界統一を掲げるからこそ、本当にマインドコントロールされたら強烈な支配下に置かれてしまうことは分かるような気がいたします。

⑥ 「人類家族世界を実現する。すべての人類が神のもとで兄弟姉妹であり、一つの家族あることを実感を持って確信させる。」

統一教会から世界平和統一家庭連合によって強調点が変わったのではないかと考えています。ここでの神とは、文鮮明のことです。今で言えば、韓ハクチャ総裁を含む、真の父母さまのことです。確かに、このような世界の実現は、人間の内心の深い憧れだと思えます。しかし、その頂点に君臨するのは教祖なのです。「統一原理の核心は家庭です。幸せは家庭の中に築くものであり、他のどこかにあるものではありません。文先生が解明した真理の核心は「神と人間は親子である」というものです。・・・」（p 80）としています。ここでも幸せな家庭を否定する人はおられませんから、人間の憧れです。しかし、親子関係の親とは教祖のことなのです。しかも、教祖の血が分かち合わねければ人間は救われぬと言う教義です。しかもその血を分け与える方法が、教祖とかわる結婚、合同結婚にあるわけです。つまり、すべてが教祖が神であり、絶対者であるという自分の都合のよいように聖書や宗教や経済や政治その他すべてを統一させようとするわけです。ここで「実感させる」という強調点が合同結婚式に深くリンクしているだろうと思えます。

b 「原理講論」より

日本語訳は604頁。前編と後編とによって成り立ちます。今回は、正面から扱い、聖書から批判する暇はありません。ただしやはりせつかくですから、結びの言葉だけご紹介いたします。

「原理講論」第6章（最終章） 第4節（5 この国であらゆる文明が結実されなければならない）」 pp596

「この国（韓国）であらゆる文明が結実されなければならない。有史以来、全世界にわたって発達してきた宗教と科学、即ち精神文明と物質文明とは韓国を中心として、みな一つの真理のもとに吸収融合され、神が望まれる理想世界のも

のとして結実しなければならぬのである……ゆえにまさしくあらゆる文明が結実しなければならぬ韓国においてなされなければならないのである。

第5節「言語混乱の原因とその統一の必然性」 p604 結びの言葉より

「子供は父母の言葉を覚えるものである。人類の父母となられたイエス（※文鮮明教祖のこと！）が韓国に再臨されることが事実であるならば、その方は間違いなく韓国語を使われるであろうから、韓国語はすなわち祖国後（信仰の母国語）となるであろう。したがってあらゆる民族はこの祖国語を使用せざるをえなくなるであろう。このようにして、すべての人類は、一つの言語を用いる一つの民族となって、一つの世界をつくりあげるようになるのである。」（完）

徹底した韓国至上主義なのです。すでにメディアで紹介されているとおり、「韓国はアダム国家で日本はエバ国家」という教義です。その意味は、エバは女性でアダムを誘惑した悪です。「日本は韓国を植民地として迷惑をかけた国」です。男性アダムである韓国は「迷惑をかけられた存在」なのです。ですから、「日本は韓国に償いをしなければならない」と言うのです。それは、日本を資金集め、悪徳、靈感商法や献金の本拠となるのです。文鮮明は「天聖經」のなかでこう言いました。「韓半島は何かといえば、男でいえば生殖器です。半島です。島国は女性の陰部と同じです。日本が1978年から世界的な経済大国として登場したのはエバ（イブ）国家として選ばれたので（中略）日本はすべての物資を收拾して 本来の夫であるアダム国家韓国に捧げなければならないのです」

そもそも原理講論の中には、最初からしっかりと自己矛盾と自己破綻からの抜け道が準備されています。原理講論（重要度三色分け1996年）p38に「ここに発表するみ言はその真理の一部分であり、今までその弟子たちが、あるいは聞き、あるいは見た範囲のものを収録したに過ぎない。時が至るに従って、一層深い真理の部分が継続して発表されることを信じ、それを切に待ち望むものである。」それはまさに最近、教祖の説教集『天聖經』（2003年編纂）が『原理講論』以上に重視されるようになっているといわれています。

こうして、教祖文鮮明の死後も教団は崩壊しないまま新しい装いを纏い始めています。彼らが「成約聖書」と呼んでいる原理講論に対して、新約聖書のヨハネの黙示録第22章18～19節を読んでみましょう。「この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、わたしは証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。」旧約聖書申命記に

もこうあります。「あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。わたしが命じるとおりにあなたたちの神、主の戒めを守りなさい。」そもそも、教祖が聖書になお不足があり、新しい啓示だと称して書き加えるようなキリスト教は、完全に異端であるかカルトであるか、とても分かりやすいのです。

文鮮明は自らを第三のアダムと言います。新約聖書で言えば、第一はアダム。第二はイエスさまなのです。第二のアダムが最後のアダムであり真の人間なのです。教祖が第三のアダム、つまり自らを最後の究極の救い主だと主張するのは、このような教えを編み出したからです。

神は本来、イエスが結婚し理想家庭を築き、地上天国を実現すべきであったというのです。ところが人々はイエスを受入れず、十字架で殺してしまいました。つまり、神の救いの計画は失敗したと言うのです。十字架による罪の贖いという聖書の救いは、部分的救い、つまり霊的な救いだけだと言うのです。だから必然的に、霊肉共の救いを実現するために地上にメシアが再臨されなければならないとします。こうしてその再臨のメシアこそ、真の父母と呼ばれている文鮮明と韓鶴子夫妻であるという教えです。

文鮮明のこのような教えは、信者をして教団上位の人間に対して絶対的に従順にならせるためのものです。彼らは、自分の頭で考え、行動することはサタンの働きに服従させられることと信じさせられます。上位指導者に、生活のすべて、夫婦間のことも報告、連絡、相談させるのです。しかも、内心そのものをも開示させられます。かつては、いずれ放っておけばマインドコントロールも解かれると思っていました。しかし今は違います。これを継続的にされたら誰が独力で解放されるかと思わされています。

そもそも、皆様の中でも、心のどこかでそんなおかしい団体に入る人もちよっと、どうかなとの思いを抱いていらっしゃる方もおられるでしょう。確かに、統一教会であることを最初から知っていれば、誰もよりつかないはずで、今もネットで、あの勅使河原本部長のビデオが見られます。しかしもし、おひとりでこれを観るだけなら入る人はごく少数だと思われま

しかし、彼らは最初は徹底的に招待を隠すのです。上手に、誘導されビデオセンターで優しくされ、親切に悩みを聞いてくれるのです。ここが味噌だと思いますが、心の居場所、暖かい人間関係がそこにあるように思われるのです。入信に至る道程は、完全にマニュアル化しています。その一本のルートしかないのです。ここが宗教リテラシーがあれば、まさにおかしいのです。あり得ない。あってはならないことなのです。

宗教の尊さの一つに、内発性というものがあります。仏教で言えば「発心」です。つまり、悟りを得たいと心の底からの願いが沸き上がることです。キリスト教でいえば聖霊の働きによって生まれる求道心です。神を求める思い、飢え渴きが与えられるのです。禅宗に「啐啄同時」という言葉があります。「啐」は、雛（ひな）がかえろうとするとき、殻の中で泣く声のこと。「啄」は、親鳥が卵の殻を外からつついて、雛が出てくるのを助けることです。弟子が悟りを開くそのとき、師匠が逃さずに助けること。統一教会は人間の策略（マインドコントロール）によって信者を獲得している。ここにまさに宗教とはかけ離れている証拠があると言えると思います。その意味で、世間に悪名がとどろいた統一教会の名称変更は伝道戦略上、極めて重要となるわけです。

ちなみに、100名ビデオセンターに誘って5名が献身者、入会者になる。2%だそうです。（自立への苦闘 統一協会を脱会して 全国統一協会被害者家族の会 編 教文館 2005年）本当に僅かです。しかし、それを承知の上でしているのでしょうか。なぜなら、この2%の全人生を収奪できるからです。他の宗教がもたらす結果とは桁外れになるわけです。

いずれにしろ彼らは、教祖の教えが原理と叩き込まれています。しかし、この原理を多くの人々に理解されません。そこで、いかなる法令違反でも、原理を貫くならそれが真理、まことだと思わされるのです。だからこそ、「息をするように嘘をつく」ことが可能となってしまいます。法令違反は犯罪ではあるが、しかし教団の倫理と論理のなかでは、神に喜ばれることとなってしまうからくりがあるのです。教祖は絶対の神です。その神に近い上位の指導者の前に常に自分に非がある、自分が悪いと考えるクセを付けさせられる仕組みなのです。創世記に登場するカインは弟アベルを殺しました。指導者、先輩はアベルです。カインは罪深いので常にハウレンソウをして、感謝と謙遜な態度で服従することが叩き込まれます。先日、テレビで、我が子が焼身自殺した被害者の父の告発に対し、教団が用意した反論ビデオの中で、元妻は、徹底的に教団側を守る発言をしました。我々は、無理にさせられていると思うかもしれませんが、本人はその指導に従うことこそ最善と考えているのだらうと思います。

ちなみに「青春を返せ訴訟」（2001年札幌地裁判決）では、統一教会の布教過程そのものがマインドコントロールであるとの認定が下され、原告の勝利が確定しています。

「公式七年路程」教祖による祝福（合同結婚）に至るまで三年半ずつの経済活動と伝道活動。つまり経済的収奪活動（万物復帰＝教祖にすべてをお返

しすること)と犠牲者の再生産。「対象者の財産の収奪と無償の労役の享受および原告らと同種の被害者となるべき協会の再生産」(札幌地裁判決)つまり、経済的収奪は、その人の全人生、全存在の収奪です。裁判で献金の一部が返済できたとしても、それが解決策、救済にはなりません。家庭崩壊……。これほど恐ろしいカルトは珍しいのではないのでしょうか。その意味で、わたしのような牧師、また教会の役割が重いことを、率直に申しますと今回、初めて気づかされました。

だからこそ、彼らと結託するようにして当選し政治家となった人々の責任、さらに教団の広告塔の効果をになった政治家たちの責任は、とてつもなく重くと言わなければならないのではないのでしょうか。議員辞職は当然ですが、道義的責任ははかり知れません。

これから国会で自民党の国会議員をはじめ、それ以上に地方議員の関与を厳しく追及しなければ、この問題は解決しません。

また何より安倍元首相との関係こそ、その本丸であることは安倍氏の岩盤支持者以外では、衆目の一致するところではないのでしょうか。

いずれにしろ、当初の予定とは違い、大変申し訳ないのですが今回はここまでにさせていただければと思います。改めて、真正面からこの文鮮明と向き合った今、私は、この教祖は、まさに宗教とは無縁の人、徹底的に世俗の人、欲望の塊、欲望を最大化した人だと思われてなりません。この原理の教義も、人類救済、世界の統一云々と言いますが、それはただ一つの目的を達成するための理論武装だと思えます。強烈なマインドコントロールを可能にし継続させるためのまさに「悪知恵」だと思えます。つまり、教祖の性的欲望を最大化すること。経済的豊かさ、ビジネスを最大化すること、そして最後に自分たちの権力欲を最大化させることです。そのために先ずは女性教祖の教えを盗んで、その上で宗教や聖書をかくれみのにして、お金、女性、名誉の三大欲望にとらわれた人間の見本です。

最後に、今回の事件によって、いわゆる「政教分離」(政治と宗教)についての議論が様々になされるようになり、危惧することが多々ありますので、触れたいと思います。

「それとの向き合い方で国のかたちが決まるという意味で、近代社会が抱えた永遠の〈課題〉であり続けている。」小原克博(同志社大学教授)

政教分離(Separation of Church and State)とは、教会と国家の分離のことです。宗教と国家の分離(Religion and State)ではありません。

これはキリスト教の歴史の中で生まれて来た概念に他なりません。発端は、ローマカトリックとプロテスタント（福音主義教会）諸教派との壮絶な戦争（三十年戦争。主にドイツ（神聖ローマ帝国）を舞台として 1618 年～1648。宗教的・政治的諸戦争の総称 ウェストファリア講和条約で終結）を経て、作られた概念です。

アメリカ合衆国憲法修正第一条（1791 年）には、「連邦議会は、国教の樹立（establishment of religion）を規定し、もしくは信教の自由な行為を禁止する法律を……制定することはできない」とし、「Separation of Church and State」の課題が初めて規定されました。

ごく簡単に言えば、国家が特定の教派（教会）に特権を与えない規定です。国家が教会の内政（教え）に決して介入させない権利です。その意味で、米国において宗教とは基本的に教会つまりキリスト教が（暗黙の・・・）前提とされているわけです。ですから大統領が就任するときに聖書に手を置いて、牧師の司式によって誓約することは政教分離違反とは言わないのです。

一方で、同じキリスト教でもカトリックの強いフランス、つまり、教会の政治的権力の支配が圧倒的に強かった場合、1905 年の「世俗法」によって、教会が政治、国家に関与することを禁じています。

イタリアでは、信教の自由を保障しつつも公立学校では神父によって教理が教えられる。

北欧では、（カトリックへの抵抗として）ルター派（プロテスタント）を国教としている。

イギリスでは、イギリスで成立したキリスト教を国教（英国国教会、聖公会）としている。エリザベス女王の国葬をご覧になって、その儀式の内実の豊かさや美しさ、荘厳さに心動かされた方もいらっしゃるのではないかと。

下記、私どもの日本キリスト改革派教会の政教分離を表した図です。簡単に言えばアメリカ型です。これに対して、ローマ・カトリック教会の場合は、幅を持たせた政教分離を採用しています。

一方で、現代の最大級の国際問題であるロシアとウクライナの戦争の背後にある東方教会（ロシア正教とウクライナ正教）は、現代でもなお、国家と教会とが一体的関係にあることを当然とするいわば「政教調和（シンフォニー）」型であり、これを目指している。背後に相互の正教の対立があることは、ほとんど報道で扱われない。キリスト者としてはまことに悲しく、厳しい思いを禁じ得ない。正に教会の責任を痛切に思われ、ひとりのキリスト者として謝罪したいような思いに駆られます。ロシア正教のキリル総主教はプーチン大統領より神の前には責任がより重いと思っています。

ちなみに、明治から敗戦までの大日本帝国とは、まさに「天皇教」を創出し、「国家神道」による「祭政一致」という完全なる宗教国家となりました。もとより、そのベースはキリスト教にあります。明治新政府は、欧米の国家の基軸にあるキリスト教の力をまざまざと見せつけられ、これに対抗するためには、新たに天皇の存在と役割を神道の伝統をもとにキリスト教の神学を流用するようにして、国家神道つまり天皇教を確立したのです。その教義は「教育勅語」から「国体の本義」(1937年 文部省編纂)によって完成されました。国体の本義の結びのことばを引用します。

【世界文化に対する過去の日本人の態度は、自主的にして而も包容的であった。我等が世界に貢献することは、たゞ日本人たるの道を弥々(※いよいよ)發揮することによつてのみなされる。国民は、国家の大本としての不易な国体と、古今に一貫し中外に施して悖らざる皇国の道とによつて、維れ新たなる日本を益々生成発展せしめ、以て弥々天壤無窮の皇運を扶翼し奉らねばならぬ。これ、我等国民の使命である。】

わたしは、どこか原理講論に似た趣を感じさせられました。古事記、日本書紀という「神話」、宗教的物語をなんと歴史的事実言い換えれば啓示！？として受け止め、立てられた教え、歴史書だからです。

もう一つの問題、宗教2世、信仰2世、祝福2世の問題についても触れます。統一教会の両親の集団結婚によって生まれた子どものことを祝福2世と呼ぶとのこと。小川さゆり(仮名、20代)さんが、当事者として過酷な思春期を強いられた事実をテレビに顔を出してその被害の深刻さを訴えられました。そこから、たとえばエホバの証人が鞭を使って子どもを教育している実態も紹介されるようになりました。旧約聖書 箴言第13章24節に「鞭を控えるものは自分の子を憎む者。子を愛する人は熱心に諭しを与える。」とある御言葉を字面だけの解釈によって、鞭を奨励している事実があるようです。

このようなことから、親が子どもに自分の宗教を「虐待」によって押し付けることへの歯止めをかける法整備が訴えられています。私自身は、この問題にやはり意見を公にすべきだと思います。初めに確認すればこのようなカルトの教えに基づくからこそ信仰の教育ではなく、信仰による虐待が起こるのだと思っています。だからこそ、その教えそのものを批判すべきだと思います。

そもそも聖書と教会は、教育権、教育する責任主体を親としています。それはいかなる意味でも教育権を国家や王にからめとられる危機から逃れさせ

る真理でもあります。素朴に言っても、親が愛する子どもを教育する責任と義務を負っているのは当然のことだと思います。また、私たちの憲法にも第26条でこのように規定している通りです。

「第1項 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

第2項 すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。」

子どもは信仰の教育を親が責任主体となって親が所属する教会共同体と共に、相互に協力しあいながら、乳幼児から施します。日曜学校という名前を聞いたことのある方がほとんどではないでしょうか。

さらに、世界の大多数の教会は、聖書に基づき幼児に洗礼を施します。幼児洗礼と言います。現実から言って、これを法律で規制することなど想像もつきません。それはまさに国家の教会とその信仰への直接的干渉となるからです。ただし、冒頭で申しましたように、宗教リテラシーに乏しい日本においては、宗教2世は、思春期になって、もしかすると自分は親からのいびつな教育を受けていたのではないかと言うような偏見が起こりえるのではないかと、ひそかに案じています。さらに言えば、親自身が確信をもって信仰の継承のための教育を施す責任感を鈍らされてしまうこと、子どもたちがテレビ報道などによって、やっぱり、日曜日に教会に連れて行かれるのは、おかしいのではないかと等と思わされることも、あるかもしれません。これは、親そして教会がきちんと向き合う必要があります。教育権は、神から与えられて権利です。だからこそ、神の御言葉に即して、賢く、子どもに向き合うべきなのです。ちなみに、幼児洗礼を受ければ自動的にキリスト者になれるのかと言えば、簡単に言えば、違います。自分の口で、つまり自分が自分の意思をもって信仰を公にするまでは、教会はその子どもを、未陪餐会員として位置づけます。つまり、会員ではあるものの聖餐という洗礼と共に大切な教会の礼典にあずかれません。また教会の会議の一員になれないのです。現在の宗教2世の被害者の声には冷静に耳を傾けつつ、一方で、宗教団体の幼児、小児、中高生らへの教育的プログラムに対するネガティブな印象を抱かせないような、法整備がなされるべきだろうと思います。

もうお話を閉じなければなりません。ANN ニュース 20221108 によれば、文鮮明は1989年に、日本の政界工作をめぐり自民党の当時の安倍派を中心に関係を強化するよう信者に説いていたことが韓国における説教の中で明らか

かになったと報じました。このような説教です。

「国会議員との関係強化です。そうして国会内に教会をつくるんです」

「二番目は秘書です。国会議員の秘書を輩出するんです。」

「三つ目は国会内に組織体制を形成することです。それで、自民党の安倍派などを中心にして、数を徐々に増やしていかなければなりません。わかりましたか」

「日本の中央の国会議員だけでなく、地方もそうです。地方にも、みなさんがいますよね」と、地方政界への働きかけにも言及した。文氏は 2007 年の説教では「私は岸総理大臣の時から関与を始めました」と振り返っていますが、これはもはや誰もが知る事実となっただろうと思います。

これまでの自民党は、岸信介氏、安倍晋太郎氏そして安倍晋三元首相と三代に渡って深い関係を築き上げました。そして第二次安倍政権の時代から、もはや統一教会との癒着を隠さなくなってしまうところまで、相互依存関係が確立したと言ってもよいと思います。実に「政策協定」まで結んでいたことも明らかになりました。その本丸は憲法改定で、9条の破棄です。つまり自衛隊の明記です。また、もっとも危険な改定となるであろう「緊急事態条項」の追加です。これも、統一教会の大きな主張と一致しています。そして何と言っても、「家族条項」です。統一教会は、「社会国家の基礎としての家庭を守る。同性婚合法化は、国家が内部から崩壊する。家庭保護の門限を追加する」というものです。これに対する自民党の改憲草案は、「家族は、互いに助け合わなければならない」という家族規定を 2012 年に新設しています。私自身のこだわりの原点である教育基本法の改悪も、今となってはまさに統一教会のイデオロギーに通じ合っていることも明らかだろうと思います。実に、自民党草案と統一教会の改憲案は瓜二つです。いったいどちらが鶏で卵なのか分かりません。カルト政治謀略集団に焚きつけられたというのが真実のような気さえ致します。

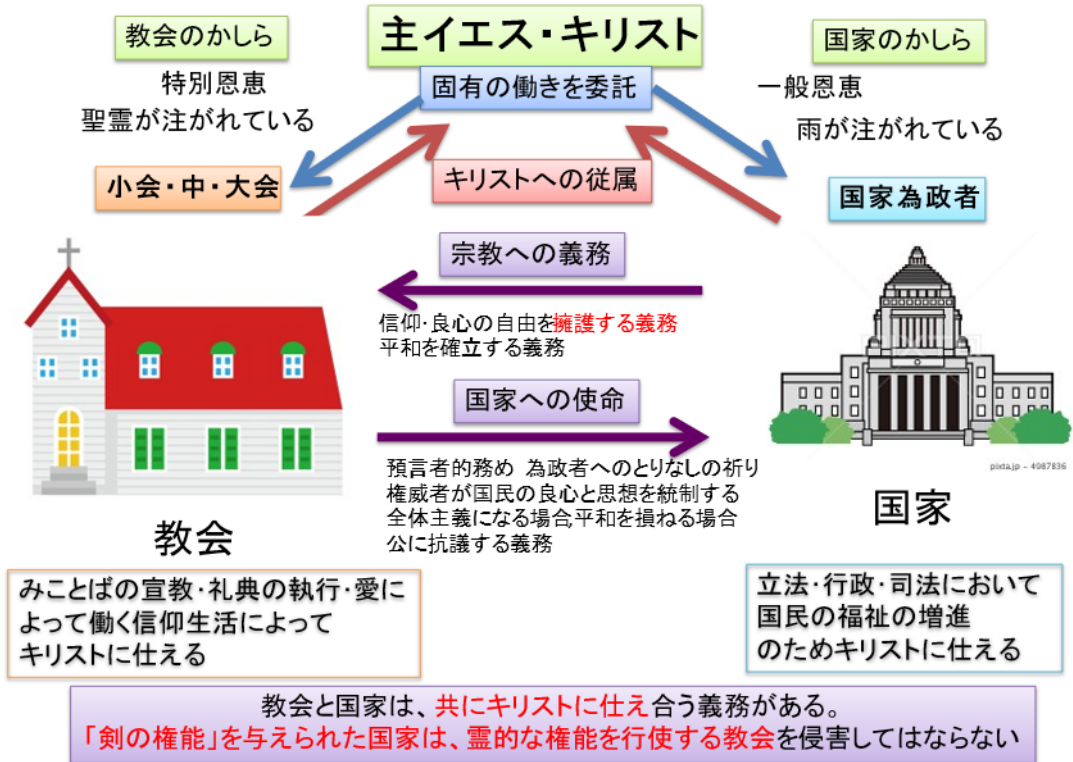
私どもは憲法カフェを重ねて参りましたが、今や、予想もしなかった事実の前に向き合わされているように思います。今、憲法調査会が政府与党、維新の強い意向で改憲に前のめりです。しかし、事ここに至って、はっきりしたと思います。日本国政府がこともあろうに外国のカルト団体の言葉の正しい意味で、強い影響を受けているのです。その証拠はすで続々と明らかになっています。前回の参院選では、はっきりと安倍氏から候補者擁立のときから統一教会票の差配によって立候補を断念させ、逆に当選へと導いた井上議員などが、典型でしょう。その他、調べればまだまだ上がって来るはずで

結局、統一教会の教祖がまさに欲望の虜となり、それを最大化させるため

に金や政治的権力や性的欲望を正当化しました。しかし、それなら自民党は、少なくとも統一教会と深く関わりをもった国会議員たちは全員、辞職が相当ではないでしょうか。

結論としてお二人の言葉で結ばさせていただきます。統一教会の闇をもっとも抉り出しておられるジャーナリスト鈴木エイトさんの「自民党の統一教会汚染 追跡 3000 日」という書物の結びの言葉です。「信者の人権を無視してその人生を奪う教団も問題だが、その信者を私利私欲のために使い捨てにする政治家はさらに問題視されるべきだ」もう一人は、法政大学名誉教授の五十嵐仁さんの今週の赤旗日曜版（11 月 13 日）の文章です。タイトルは「統治政党の資格喪失—自民党の歴史的役割は終わった」で、結びはこうです。「戦後、自民党は日本政治に一定の役割を果たしてきたかもしれませんが、いまや憲法に対する規範意識もない。外国勢力と通じ、憲法を順守しないというのは、統治政党としての資格喪失です。韓国の反社会的カルト集団の手先のようにになっている自民党の歴史的役割は終わったと思います。」

おわり



主な参考図書

「原理講論（重要度三色分け）」	世界平和統一家庭連合	1996年	光言社
「はじめての統一原理（文鮮明先生が解明した真理）」		2014年	光言社
「淫教のメシア文鮮明伝」	荻原遼	1980年	晩聲社
「自立への苦闘 統一協会を脱会して」			
	全国統一協会被害者家族の会編	2005年	教文館
「自民党の統一教会汚染 追跡 3000日」	鈴木エイト	2022年	小学館
「統一協会＝勝共連合とは何か」	日隈威徳	2022年	新日本出版社
「統一協会信者を救え 杉本牧師の証言」		1993年	緑風出版
「文芸春秋 統一教会と創価学会」（文鮮明は母をレイプした）		22年10月号	
「統一教会からまことのメシヤへ 原理講論のまちがいをただす」			
	森山諭編著	1986年	ニューライフ出版社
「霊と金 スピリチュアルビジネスの構造」	櫻井義秀	2009年	新潮新書
「仏教の大東亜戦争」	鶴飼秀徳	2022年	文春新書
「ウクライナ侵攻とロシア正教会」	角茂樹	2022年	カワデ夢新書

「異端とは何か」 井出定治 1988年 いのちのことば社

.....

「隠されたものみの塔の実態」 1996年 いのちのことば社

「エホバの証人への伝道ハンドブック」 1994年 いのちのことば社

「エホバの証人への伝道とフォローアップ」 1995年 いのちのことば社

「エホバの証人はキリスト教か」 1986年 いのちのことば社